
ミレニアム・エフェクト

出雲 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミレニアム・エフェクト

【Nコード】

N0932P

【作者名】

出雲 明

【あらすじ】

2000年を境に突如現れた人知を超えた力を持つ人間”異能者”、彼らは人とは違う何かしらの能力を持つがために悩み苦しんでいる。

2019年の冬。高校三年生の御巫翔夜は進学先の大学も決まり、暇な学校生活を送っていた。

そんなある日の放課後、翔夜のクラスメイトの不知火彩が黒い高級車に乗せられ連れて行かれるところを目撃する。後が気になって追いかけた翔夜はつぶれた廃ビルへとたどり着くのだが

ブローグ

1999年、冬

「お待ちしていました、チーフ」

重たく冷たい鉄の扉を開けると、パイロット服姿の男が私に敬礼をして迎えてくれた。こちらでも軽く敬礼をし、ヘリポートのほうへと足を急がせた。古くから愛用しているコートを着ていても寒さが身にしみるのはビルの屋上にいるからだろうか。もうすぐ還暦を迎える私にとってはこの寒さは堪える。年寄りはいたわってほしいものだ。

「ご苦勞、出発の準備を」

「了解しました」

すぐさまヘリの離陸準備にかかるパイロット。年は三十半ばといったところか。伸ばし放題のひげとばさばさの髪の毛のせいで、実年齢よりふけて見えているような気もするが、それほど変わり無いだろう。

彼に続いて私もヘリに乗り、鞆からノートパソコンを取り出し電源を入れた。一般人が持っているパソコンとは違い、とりわけこいつはいい性能だと日本支部の研究員は言ったか。

が、私にとってそんなことはどうでもいい。正直、このパソコンとというのはどうも理解できない。爺臭いといわれてしまうが仕方ない、実際爺だ。

「計画の報告を頼む」

「はい、既にアメリカ、イギリスでは計画の実行を確認。残るドイツ、イタリア、中国でも準備が終わり次第実行との連絡がありました」

「そうか、我々日本支部も急がねばなるまい」

パソコンが起動すると、すぐさま電子的な世界地図が表示された。なるほど、確かに計画は進んでいるようだ。報告通り、アメリカとイギリスの領土が赤く染まっており、「完了」の文字が表示されている。

ふいに急なゆれが体を襲ったかと思うと次はヒュンヒュンというプロペラの回転音が鳴り出した。次いで、ふわっ、と地から足が離れるような感覚が来ると、ヘリはだんだんと空へと上昇していく。

「準備が出来ました。チーフ、ベルトを締めてください」

パイロットの声がかき消されそんな轟音とともにヘリは黒い夜の空へと飛び立った。私が目的地を告げると、ヘリは都会のビル群を縫うように飛んでいった。

「チーフ。本部は、何故今日まで計画を延ばしたと思います？ 1月30日に」

ビルの屋上から飛び立つて数分がたったころか、ふいにパイロットが言った。私はヘリの後部座席に座っているので表情は読み取れないが、語気には好奇心がこもっていた。前々から気になっていたのだろう。

「君はミレニウム・バグを知っているかね？」

「はい、2000年になると電子機器がおかしくなるって言う噂の？」

ほう、よく知っている。やはりマスコミ連中が情報を流しているのだろう。いまや、情報は即座に手に入る物になったと言うことか。

「そうだ、ボスはそれを利用するつもりだ」

「それは、どういう……」

「サイバーテロ、と言えば分かるかな？」

暫く沈黙が続いてから、パイロットは、あつ。と呟いた。どうやら何かにつながったようだ。だが、それでもまだ正解の半分だろう。なるほど、それで今日まで待っていたと。ミレニウム・バグを懸

念しているところに何かしらの情報操作を行う訳ですね？」

「うむ。だが、それは隠れ蓑にしかすぎない」

ん、とパイロットは唸った。当然と言うべきか、どういうことなのか聞き返してきた。

「隠れ蓑？」

「サイバーテロはあくまでこの計画を隠すための煙だ。本質はこれから行う」

それから私はパソコンのディスプレイに映し出された計画の詳細をパイロットに話した。どれも内容は極秘のものだが計画を知るもの同士、隠すことも無いだろうと思い、続けた。

「確かに、ものすごい計画ですね。何故こんな私が選ばれたのか信じられません」

「君の操縦の腕が良いからだろう。……そういえば名前を聞いていなかったな」

パイロットはこちらに振り向き、若干嬉しそうな微笑を浮かべてから口を開いた。

「長谷川です、見てのとりのパイロットです」

「日本支部長のソコロフだ、よろしく」

「ロシア人だったのですか！？」

あまりにも長谷川が驚くので私は思わず笑ってしまった。この男は感情を表現するのが得意らしい。さっきの声だけでも十分感情の変化が分かったぐらいだ。そこに顔までつくと、なお分かるから面白い。

「ああ、これでお互いのことが少しでも分かったな」

「ええ、そうですね」

またも口の端に笑みを浮かべる長谷川。まったく、本当の意味も知らないだろうに。

「そろそろですよ、ソコロフ殿」

「そうか、ご苦労だった」

パソコンのキーを叩きパスワードの承認画面を出す。私のIDと

パスワードでしか解除されないそれを外すと、組織のロゴマークが背景の画面が現れ「《リヴァイス計画》を始動しますか？」と表示された。

「これが終わったら、一杯どうかね？」

「もちろん、お願いします」

「さて、世紀の瞬間だ。旧い時代は終わり新しい時代の幕開けだ」

YESのキーを叩くとパソコンの画面にある兵器のデータが表示され、それが町全体に散布されるシミュレーションが開始された。そして

世界が変わり始めた。

2019年、冬

カチャカチャと金属が擦れ合う音以外何も聞こえない教室。リズムカルな音楽は俺、御巫翔夜が作り出している。

ここは俺が通う鳳華学園。この地域では名門と名高い高校だ。まあ、実際はそれほどたいした実力ではないが。かなり古くからある高校らしく、外装はレンガ造り、中は木造で、床や壁に染み付いた汚れが歴史を感じさせる。俺が今いる部屋も、ところどころに落書きや汚れがある。

きつと、何人もの生徒がここで友達と話したり学んだりして卒業していったのだろう。俺もその一人に、もう少しで仲間入りをはたすのだ。

ふと、リズムカルな音が止まった。なぜなら俺がこの仕掛けをといたからだ。

「よっしゃ、とれた」

と、机の上に投げ捨てたそれは奇妙な形をした金属の欠片が2つ。いわゆる、知恵の輪という奴だ。難易度がすこし高いやつを選んだので以外に時間がかかってしまった。ちなみにこれが俺の趣味でもある。変わっていると言われてしまうが……。

「ふん、なかなか手ごわかったぜ……って、一人で盛り上がったもなあ」

日はすでに傾き、教室の中を淡い赤に照らしている、教室には俺意外誰もいない。皆、やれ補修だ、やれ資格取得だとこの時期になつて慌ただしくあせっているのだ。世の中の学生、特に高校生は大学受験で、今がもっとも忙しいのだ。いや、中学生も入るのかな？とにかく、受験シーズンというやつだ。

「なんだ御巫、まだいたのか？」

名前を呼ばれて振り向くと担任の藤原先生が俺を見ていた。教室に入り込んだ日差しで先生の体はオレンジに染まっている。今年で五十歳になると言っているが、傍から見れば三十歳に見えるぐらいの若さだ。体育教師である先生の体はしつかりとした体つきで、年に数回、マラソンやトライアスロンに挑戦しているらしい。それが若さの秘訣なのかもしれない。

「呼び出してここで待たしていたのは先生だろ？」

「ああ、そうだったな。すまん、忘れていたわ」

先生は軽く頭をかいて俺の前にある席のいすに腰掛け、煙草とライターを取り出しながら話を続けた。先生、生徒の前で煙草を吸うのはどうかと思うぞ。

「お前も大変だな、せつかく大学の内定がきまったのに学校に来ないといけないなんて」

「仕方ないですよ、卒業に必要な単位が取れてないから」

ふーん、と素っ気もなしに先生は煙草に火をつけた。まったく、不謹慎というべきか自由奔放というべきか。

「しかし、単位が取れてないのに内定受かるなんて不思議な話だな」
そうだ、普通は単位が取れているのが当たり前かつ、成績優秀でないと内定などもらえないものだ。それなのに俺は、今年の夏ごろに病気で入院してしまい、単位が取れてないのにもかかわらず内定が出たというなんともおかしい現象に巻き込まれて学校に来ている。
「で、話は変わるんだが御巫。待ってもらっていたのはこれなんだ」と、渡されたのはどこから引つ張り出てきたのかと言いたいくらいのプリントの山だった。思わず顔が引きつる、なぜならこれ全部

「お前が夏、休んでいたときにたまっていた宿題だ。渡すのを忘れていたんだよね」

「冗談だろ？　と言いたいが、何かと忘れっぽい性格の先生だ、今の今まで溜め込んでいてもおかしくない。

それより、この宿題の量多すぎだろ！

ああ。と頭を抱えなくなるが、やらないと卒業できないだろうな
と思い、大人しくそれを通学かばんの中へとしまった。藤原め、覚
えておけよ。

「じゃあ、よろしく頼むぞ」

ひらひらと手を振って出て行く先生の背中を睨みながら、俺は窓
のほうへと足を向けた。特に理由はないが、なんとなく風にあたり
たかった。

冬の夕方は日が落ちるのが早く、空はすでに茜色から夜空の黒へと
飲み込まれようとしていた。ひゅっ、と吹き付ける風も冬らしく研
ぎ澄まされた涼しさがある。

暫くの間、俺は何も考えず冬の空をぼんやりと見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0932p/>

ミレニアム・エフェクト

2010年11月25日09時40分発行